

# 教員養成課程における「保育内容（音楽表現）」の授業実践研究

－多様性・融合性および創造性に着目して－

A Lesson Study of 'Expression' in the Course of Study of Kindergarten in Teacher Training Course Based on Diversity, Syntheticity and Creativity

廣瀬 史佳    小島 千か    秋山 麻実  
Fumika HIROSE    Chika KOJIMA    Asami AKIYAMA

# 教員養成課程における「保育内容(音楽表現)」の授業実践研究

—多様性・融合性および創造性に着目して—

## A Lesson Study of 'Expression' in the Course of Study of Kindergarten in Teacher Training Course Based on Diversity, Syntheticity and Creativity

廣瀬史佳\* 小島千か 秋山麻実  
Fumika HIROSE Chika KOJIMA Asami AKIYAMA

### 1. はじめに

平成29年度改訂幼稚園教育要領では、従来の教育の内容とねらいを枠づける5領域に加えて、新たに「卒園までに育ってほしい姿」が示された。これは5領域の活動を通して資質・能力が育ったときの具体的な姿として挙げられたものであるが、ここでは10番目の項目として、「豊かな感性と表現」が設定されている。その内容は、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」となっており、5領域の「表現」が、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とされているのに対し、「感性」という内面の動きを表題に出しているとともに、喜びや意欲といった内面のあり方自体に踏み込む内容となっている。

子どもたちの心が動いたり、楽しむ、喜ぶ、意欲をもつといった内面の変化を求めるためには、園生活における子どもの感じ方、考え方、捉え方をていねいに見取る大人の力量が不可欠である。「ねらい」のなかには、「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」という表記があり、これを実現するためには、素材や機会、環境を与えたり、自由な活動や遊びを組織したりするだけでなく、子どもたちの日々の暮らしのなかで芽生える感覚や感情、思考に、大人が気づき、育ちの保育内容や育ちの契機として検討し、表現と結び付ける力量が保育者に必要となる。

またそのさいの表現は、音楽や美術という分野に分けられるよりも、「内容」の(4)にあるように「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」という融合的なかたちで行われる可能性がある。特に「内容」の(8)では演劇表現も言及されており、行事のための劇の発表ではなく、物語を味わい、楽しみ、表現を通して反復と共有、想像と創造を重ねていくような総合的な活動が求められている。さらに、「表現」という用語は、保育内容のなかで「表現」に関する部分だけでなく、「ことば」などのなかにもみられ、ことばを使って感情や考えを伝え合うということを指す場合にも用いられている。

そうした事情を鑑みると、保育内容としての「表現」は、子どもの内面や感性と結び付けて捉えられなければならないこと、そのために①日常の園生活のなかで子どもの感覚や感情、思考と結びつけられて計画されなければならないこと、②豊かなイメージや表現を楽しむものであること、③融合的であること、④創造的で自由であることを前提としており、幼稚園教員養成のカリキュラムとしてもまた、これらを可能とする能力の育成を目指すものでなければならない。

本論文は、園生活においてみられる子どもの感覚や感情、思考に対して、保育者として気づき、返していくための能力を身につけること、さまざまな表現方法を楽しむこと、融合的な表現のあり方につい

\* 山梨大学教育学部非常勤講師

て学ぶこと、創造的な学習をすることをねらいとした「保育内容(音楽表現)」の授業のあり方について、廣瀬による授業実践、小島による融合的な表現の学習に関する評価、秋山による共同授業評価コーディネートという分担のもとに、考察・検討を行うものである。

これまで幼児音楽に関わる教員養成カリキュラムの研究としては、多くの研究の蓄積がある。それらの研究のなかで問題になっていることは、幼稚園教育要領や保育所保育指針等では、幼児の豊かな感性を引き出したり、日常の音に注意を向けたり、定型化されてないかたちでさまざまな音を楽しむといった幼児の活動が重視されているにも関わらず、保育現場ではピアノの伴奏技術が求められることが多く、それに対する苦手意識が保育者あるいは保育を目指す学生の課題になってしまうことが多いこと、また保育現場で集団練習などに力を入れるあまり、自由で創造的な音楽表現活動に払う関心や時間が少なくなってしまうことである。たとえば子どもたちがわくわくするような音楽のあり方について学ぶ研修のあり方についての研究や<sup>1</sup>、音楽理論における「変化」の概念から子どもの創造性を価値づける研究<sup>2</sup>などが挙げられる。またピアノの技術を求められる一方で、「保育現場において子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくためには、ピアノよりも、声による言葉や歌のやりとりの技術が重要」とする指摘もある<sup>3</sup>。一方、保育現場の実情に合わせてピアノも含めた学生の技術的な未熟さの克服の方法を探る研究や<sup>4</sup>、演奏技術の向上という方向性に合わせて子どもの意欲的な参加を促す保育方法の開発を目指す研究などもある<sup>5</sup>。

つまり大別すると、音楽表現活動のあり方そのものを問う研究と、実践的なニーズに合わせた保育者養成の方法論を問う研究があるといえる。また現実的にそれらを結びつけるために、演奏者の負担を軽減しつつ音楽を楽しむための伴奏バリエーションを増やす方法の開発や、絵本や劇など総合芸術の創造活動を取り入れた授業を保育者養成において行うことを提案し、意味を検証する実践研究などがみられる<sup>6</sup>。しかし、幼児教育学、音楽科教育学、音楽専門の立場から多角的に意見を交差させることにより、幼児の音楽表現を豊かにするための保育者養成カリキュラム開発を行った研究は多くない。そこで本論文は、教科教育学と教科内容の融合および多様性に基づくカリキュラム開発の可能性を探る。

## 2. 授業の概要と基本理念、工夫

本論文で扱う授業の概要は、以下の通りである。まず、授業のねらいと概要は、「実際に身体を動かしながら、日常生活や身の周りの様々な音、音楽に気づき、身近なものを題材にしながら、相手に伝わる表現方法を磨く。幼児の音楽表現を引出し、豊かなコミュニケーションを築くための創造的・想像的音楽活動を学ぶ」とした。これは、上述のねらいに沿ったものである。

シラバスは、以下のとおりである。

### 1. アンケート

リズム遊び①：それぞれの音符の性格を考え、音符からイメージするものになりきって表現する。音楽に合わせて身体を動かす。

2. リズム遊び②：手拍子 ボディーパーカッション ボイスリズム リズム合奏

3. オノマトペで音楽しよう①：喜・怒・哀・楽・愛・憎を6つのグループにわかれて言葉とリズムで表現する。

4. オノマトペで音楽しよう②：リハーサルとグループ発表

5. 詩で遊ぼう①：〇〇になりきって表現してみる。

6. 詩で遊ぼう②：詩にリズム、音楽、歌を自由につける。グループ創作活動。

7. 詩で遊ぼう③：リハーサルとグループ発表

8. 楽器に触れてみよう：大学にある楽器に触れて音を出してみる。楽器がもつ特性や音色を楽しむ。

どんな表現が生まれるか。

9. 音楽を描いてみよう：絵・色・線・文字・図形を描いてオリジナル楽譜を作る。グループ創作活動。
10. 描いた音楽を表現してみよう：楽器（手作り楽器含む）、身体（動き）、声（言葉・オノマトペ）、手・足（リズム）で発表する。
11. 季節の歌を歌ってみよう①：夏の曲。ピアノまたは自分の得意とする楽器など各々の得意分野を生かして、保育者になりきって伴奏し、その他の学生は子どもの立場に立って一緒に歌ってみる。お互いの立場から見えてきたことや気が付いたことをディスカッションする。
12. 季節の歌を歌ってみよう②：秋・冬の曲。内容は、11回目と同じ。曲のイメージを膨らませるための演奏方法はどのようなものがあるか。表現を深め、演奏効果を高めるにはどうしたらよいか。
13. 絵本の世界を表現してみよう①：12回目までに学んだ表現方法を生かしながら、絵本の世界を表現する。
14. 絵本の世界を表現してみよう②：グループ創作活動
15. 絵本の世界を表現してみよう③：リハーサル グループ発表 まとめ

授業を構成するにあたり、参考にした文献は、石井玲子編著『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』（保育出版社）、吉永早苗著『子どもの音感受の世界一心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究』（萌文書林）、星山麻木編著、板野和彦著『一人一人を大切にユニバーサルデザインの音楽表現』（萌文書林）の三冊である。学生には必要に応じて、筆者が教材化して編集したプリントを配布した。

授業全体を通じて配慮したことは、多様性だった。多様性は、ものごとに対して子どもたちがそれぞれに感じる事、考える事、それらを表現することを、促すための原則として位置づけることができる。学生が将来保育者になったときに、子どもたちが、園内外の日常生活における音や風景をどのように捉えて、どのように表現するかは、予測不可能な部分がある。保育者が予測し、準備した活動とは異なる子どもたちの多様な表現を、大切な表現活動として受けとめ、ていねいに返し、より豊かな表現を促す能力が、保育者には求められる。そのためには保育者自身がさまざまな音やその素材に気づくこと、感じることで、その多様な可能性に気づくことが必要である。また色々なかたちで身体や楽器、絵画、物語などが関連する表現を体験することで、その多様な手法や面白さに気づくことも必要である。

そのために、シラバス中の第3回から始まるオノマトペの部分と関連させるかたちで、学生が日常の音に耳を傾けて、音の日記をつけてみる一週間の宿題とその振り返りを取り入れた。

また、そのほかに工夫したこととしては、実際に授業を始めてみて、学生にはピアノ演奏の需要が高いことがわかったことや、またじっくり発表作品を作ったり、子どもに色々活動させるためのアレンジの方法なども必要だったことから、詩で遊ぼう（5～7回）をとりやめ、代わりに発表のための練習と、ピアノ演奏、およびアレンジを学ぶ時間にした。ピアノ演奏が苦手な学生に対する特別指導を3回行い、基本的な楽譜の読み方や運指、保育でよく使われる曲の伴奏の練習などを行った。

また学生の感じたこと、考えたことを明確にするとともに、それについて気づき、返すという実践を指導される立場として経験させるために、授業毎に5行程度の感想を書かせ、筆者から返信を書いた。またすべての授業について一枚の紙におさまるかたちによって、成長や変化を学生自身も教師も気づけるようにした。

以下では、授業の内容と学生からのフィードバック、作品を通して、身近な音を聞くことの意義、学生同士の活動の意義、視覚表現と音楽表現の関連の意義について論じる。

### 3. 身近な音を聞く経験

第2回の授業から一週間、学生たちへの宿題として、身近な音を聞き、「音の日記」を書くという課題を出した。1週間分の日付と3行程度を書き込める欄、天気と1週間書き終えての感想をまとめて3行ほどで書く欄を用意した。この課題のねらいは、幼児が日常で気づくさまざまな音の広がりと可能性を、学生に実感させることだった。

学生たちの記録は、大きく次のように分類できた。

#### ①いつも聞こえている音を漫然と書く

「アルバイト先のお店はザワザワとにぎやかだった」

「レジ打ちでピッと音がした」

「「サキソフォン」の音を生協前で聞いた。格好良かった」

このように、聞くということに特別に注意を払ったような書き方をしておらず、聞こえてきた音を書いたようにみえる学生からも、感想をまとめるときには、この課題が日常の音についてあらためて考える機会になった。

「楽器のみならず、自然の音にもっと耳を傾けたい」（音楽サークルに入っている学生）

「普段聞く何気ない音でも意識を向けると意外とおもしろい音があるなと思った。特にアルバイト先でよく出る音がおもしろいと感じた」

この課題は、音楽という枠組みに慣れ親しんでいる学生においては、音楽ではない音というものの存在へと目を向ける契機となっている。また、社会でさまざまな人が行き交い、仕事をし、あるいは買い物などの活動をしているなかで、さまざまな音が発生していることに気づいた学生にとっては、子どもたちの日常が、興味深い音で溢れている可能性を気づく機会にもなった。

#### ②静かな時に耳を澄ます

「少人数の授業はシーンとしている。授業で色紙を使ったので、カサカサとなった」

「今日は保育士試験があって、カッカカッカというペンの音がした。ペラッと紙をめくる音もした」

本来ならばすべきことに集中する場面であるが、耳から入ってくる音に気持ちを向けてみたことがわかる。子どもたちの日常生活のなかにも、大人の意図とは異なるところへと耳を傾けていることがある。音の日記を書くにあたって、学生は、そうしたさまざまな音の存在に気づいた。

#### ③音に反応して抱いた感情を書く

「古めの自転車に乗ったおじさんの自転車のブレーキ音。大きくて高くて耳にはあまり心地良くない特徴的な音がした。思わず心のなかで「うるさーい！」と思ってしまった」

「学校からの帰り道に、自転車で下っているときの音。風をきる音が次第に大きくなり、少しだけ恐怖を感じ、ブレーキをかけると風の音は小さくなり、少し安心した」

音の日記を書くにあたり、「〇〇の音がした」と記録するだけではない学生がいた。このことは、音の原因や状況、意味を感じ取り、それに対して感情がわくという流れを、学生自身が書くことで、音や音楽が、他のものごとの存在とのつながりがあることに気づくことができた。

### 4. 学生同士が違いを生かし、楽しめる授業実践

第2回で単語の音節リズムやオノマトペを使って手拍子を打ったり、身体を使ってリズムを刻んだりし、第3回にグループで曲や物語を創作する授業を行った。そのねらいは、幼児の音楽表現にふさわしい方法の学習だけでなく、授業の比較的早い段階で、学生同士が協力する活動を多く取り入れることにもあった。

学生たちのなかには、音楽やリズムが苦手だと感じている者も多い。「一つだけであれば簡単なリズムであるのに5つのリズムが重なり合うことで、とても難しく感じた」「リズム感が苦手と周りに合わ

せようと頑張っている時に大丈夫？と言われてしまい、心が折れそうでした」といった感想がみられた。

しかし、グループで創作活動をする、「リズムが苦手なので「リズムを創作する」ときいたとき、できるか不安だったのですが、同じグループの人たちや先生の力を借りながらなんとか完成でき、楽しく活動ができたので良かった」という感想に変わった学生がいた。このとき学生は、学生同士で支え合うことで音楽表現へのアプローチが容易になること、そこを乗り越えると楽しい活動になり得ることを経験したといえる。

またある学生は、グループのメンバーから出たアイディアを面白いと感じて、計画を変更し、発表をより面白いものにしようとした。「本来は自動車（の音の表現）だけでやっていくつもりだったが、M君が「暴走族」と言っていたので、思わずそれを拾ってしまった」。学生が自分たちの「ノリ」で活動をする場合、それが子どもたちにとってわかりやすく面白いものになるかどうか、倫理的にふさわしいものであるかどうかということを問う必要がある。しかし、このときには子どもたちにわかりやすいような工夫が見られたため、まずは楽しいと思うことが創造性へとつながる経験を優先した。

学生の視野に入っていたのは、同じグループで助け合った学生だけではない。「他のグループの発表も色々な工夫があって楽しめました」「私たちのグループは間をつくらなかったけど、他のグループが間をつくっているのを聞いて、おもしろくて良いと思った」「もっとふくぎつななものもつくりたいなと思いました」など、他のグループの発表から刺激を受けたり、次にやってみたいことを考えたりしていた。

このように、学生同士で学び、刺激しあうだけでなく、学生たちは子どもにとってふさわしい表現かどうかということを気にかけて、感想を書いていた。「ヴォイス・パーカッションのように口ずさんでみたり、リズムを食べものの名前にあてはめてみたりすると、子どもも楽しめるのではないかと思います」。

## 5. 視覚表現と音楽表現

授業では、打楽器に親しんでから、絵や図を使ってオリジナル楽譜をつくる活動をした。方法としては、まずグループを作って、各グループにつき4枚の絵を描かせ、それらの絵をグループ間で交換して、絵から連想する音楽をつけた。子どもたちは必ずしも楽譜が読めるわけではない。しかし記号やその他の視覚表現で、イメージや音の流れなどを共有することはできる。そうした表現の間の往還を学生に経験させるのが目的であった。

一方、既存の絵本に対して音をつけてパフォーマンスをするという活動も行った。授業内で互いに発表した後、改善を加え、それを附属幼稚園の子どもたちの前で発表した。ここではまず、この実践から一つの事例を取り上げ、この活動の意味について学生たちと子どもたちの両面から考えてみたい。その次に、学生たちがオリジナル楽譜を作り、音楽を作っていく活動について考察する。

### 1) 絵本に音や音楽をつける活動

絵本と音および音楽の関わりに関しては、(1) 絵本に内在する音楽性についての論述、(2) 教育の場における絵本を基にした音楽づくりの活動、(3) 音楽を取り入れた絵本の読み聞かせの活動などがある。(2) 教育の場における絵本を基にした音楽づくりでは、オノマトペや絵の視覚的イメージが音や音楽と結びつきやすい絵本を用いた実践、物語の様々な場面で感じられる「音」を表現させる実践などがある<sup>7)</sup>。

ひとつのグループで用いられた絵本『ピカゴロウ』は、雲の上から落ちてしまった雷の男の子ピカゴ

ロウが、落ちた家の女の子(ひなちゃん)と協力して雲を呼んで空に帰っていく物語である。学生たちが音楽をつけたのは、以下の部分である。

- ①雷の「ピカッ!」や「ゴロゴロゴロゴローッ!」といったオノマトペの部分で「ピカッ!」にはトライアングル、「ゴロゴロゴロゴローッ!」には大太鼓で、オノマトペの感じを音で表現した。
- ②空から街の様子をピカゴロウが覗いている場面で、救急車のサイレンをピアノでH音G音の繰り返して表したり、街の雑踏などを鈴で表したりした。
- ③「くもこい くもこい くもこい こーい」と雲を呼ぶために太鼓を叩く場面で実際に太鼓(沖縄の手持ち太鼓であるパーランクー)を叩いた。この場面には「ドドドン ドドドン ドドドン ドン」というオノマトペが示されている。
- ④空からやってきた雲の様子(小さな雲とその下に雨が降っている絵)をシェイカーで表現した。
- ⑤ピカゴロウが何度も太鼓を叩いて雲を呼んでも大きな雲が来なくて泣いてしまう場面に、久石譲作曲『となりのトトロ』の《風の通り道》をつけた。
- ⑥大きな雲がやってきた場面でシンバルを鳴らした。
- ⑦ピカゴロウが空へ帰っていく場面(空に向かって金色に輝く階段をピカゴロウが登っていく)をグロックンシュピールのグリッサンドで表現した。

絵本には音楽をつくる出発点となる要素があり、筆者のこれまでの実践研究では、音楽づくりの着想の源として「言葉」「絵」「動物」「オノマトペ」「展開」「気持ち」があることを明らかにした<sup>8</sup>。そこで、以上の音をこの着想の源に当てはめてみると以下になると考えられる。

「絵」②④⑦

「オノマトペ」①③

「展開」⑥

「気持ち」⑤

このように、学生たちは絵本に音や音楽をつけることを一つの視点からではなく、「絵」「オノマトペ」「展開」「気持ち」といった複数の視点から考えて音をつけていることがわかる。また、実際の音が存在するものばかりでなく、⑦の空へ続く金色に輝く階段の様子や、⑤ピカゴロウの悲しい気持ち、⑥の場面転換の部分などにも合う音が考えられていた。これらのことは、学生にとって本授業の目的である創造的な学習であったと考えられる。

さらに、③の「くもこい くもこい くもこい こーい」と太鼓を叩きながら雲を呼ぶ場面は、「くもこい くもこい くもこい こーい」の言葉に「ドドドン ドドドン ドドドン ドン」のオノマトペを、実際に太鼓を叩いて重ねたことにより、この言葉がリズムカルなものになった。この部分は複数回あるが、最後には子どもたちも一緒に雲を呼ぶことに参加してもらい、大きな雲を呼ぶことができた、という流れが学生によって考えられていた。実際に子どもたちは太鼓のリズムに乗って声を合わせて「くもこい くもこい くもこい こーい」を叫んだ。このことにより子どもたちは、一層ピカゴロウの気持ちに入り込むことができたと考えられ、子どもたちの最後の感想には、この部分が一番楽しかったというものがあった。また、学生のパフォーマンスの後に帰る支度の最中にテラスに出て、空に向かって「くもこい、くもこい」と呼んでいる子どもたちもいた。これらの部分は、授業目的の一つである「子どもの感覚や感情、思考に対して保育者として気づき、返していく」ということが実現できた部分であると考えられる。この事例は、学生たちが本授業の目標を達成できていることを示している。



＜学生の発表＞

さて、絵本と音楽の関連について別の視点から考えてみたい。学生がつけた音は全て効果音である。これらの効果音は、絵本の絵や言葉、読み書かせの音声などから子どもたちが自由に感じとることが重要であると考えられることもできる。したがって、このような絵本に音をつけた読み聞かせの活動ばかりではなく、普通の読み聞かせにおいて、子どもたちに様々な音を意識させるような働きかけを考えることも大事になると考える。また、絵本全体が何らかの反復によって成り立つ絵本を用い、その中で繰り返される言葉を歌にしたり、反復する音楽を考えたりして、子どもたちと絵本の読み聞かせを歌や音楽と共に楽しむ実践がある<sup>9</sup>。このような取り組みを行うことは、子どもとの関わりに役立つ学生の音楽的能力を伸ばすことにつながり、子どもと様々な表現を楽しむ方法の一つであると考えられる。

この事例の成果は、絵本の読み聞かせが終わった時の子どもたちの反応が示していた。終わった瞬間に「もう一回、もう一回」とのアンコールの声が沢山あった。子どもたちの感想には、雲を呼ぶことに参加して楽しかったというもの以外にも、太鼓やシンバルがよかったとの声が多く挙がった。絵本に音がつくことで、より絵本を楽しめたことが子どもたちにとって良い経験となったと考える。

## 2) 視覚的表現と音楽づくり

音楽を描き、友達が描いた絵を基に音や音楽をつくる活動は、授業目的である「園生活においてみられる子どもの感覚や感情、思考に対して、保育者として気づき、返していくための能力を身につけること」「創造的な学習をすること」に主に関わると考えられる。

まず音楽を描く活動は、絵・色・線・文字・図形を描いてオリジナル楽譜を作るというテーマがあり、描く絵の参考例として図形楽譜的なものと音が感じられる情景が示されていた。図形楽譜的なものは、図の形の特徴や動きを音に表しやすい。音が感じられる情景には鳥がいる森の様子があったが、そこからは鳥の鳴き声や風の音、その他にも自然界の様々な音を想像して音に表すことができるだろう。このような絵を描くことを目的とするということは、色・線・文字・図形と音や音楽の関係を考えさせたり、身の回りの見過ごしているような様々な音に改めて気づかせたりすることである。これは、融合的な表現による創造的な学習であり、園生活における子どもの感覚や感情の理解につながると考えられる。

次に、絵から音楽をつくる部分について考えてみたい。この活動は、自分の描いた絵ではなく他の学生の描いた絵を基に音楽をつくることが重要な点である。自分の描いた絵を音や音楽にするのであれば、上記の学習の延長でしかない。しかし、他の学生が描いたものを音や音楽で表現することは、視覚と音楽の関連について再び別の視点から考えることであり、先の学習を改めて振り返ることになる。さらに、単に視覚的なものから音や音楽をつくるのではなく、その音や音楽の受け手であり、つくる基となった絵を描いた学生を意識してつくる活動であると考えられる。それは、子どもの何らかの表現に対して保育者がどう関わるかを考える場面にも通じるものである。以上から、この活動は、幼稚園教員養成の

カリキュラムの一つとして重要な側面を有している。

さて、幼小の接続を考えた場合、小学校での音楽づくりのあり方も考慮する必要があるだろう。小学校の音楽科教育ではこのような音を表現するだけでは不十分である。風の音や、鳥の鳴き声をそのまま真似て音にするだけであれば、それは音楽ではなく効果音であるとして批判されてきた。平成29年告示の小学校学習指導要領では、例えば低学年の音楽づくりの内容には「どのように音を音楽にしていくかについて思いをもつこと」が示された。現在使用されている教育芸術社の小学校1年生の教科書<sup>10</sup>には、星空を表す音楽をつくる題材が掲載されている。夕方と夜と明け方の三つの絵とそれを説明する言葉が添えられている。夕方は「ゆうがたになって、とおくの そらに ほしが ひかりはじめました」と書かれ、どんな楽器をどんな強さで鳴らすかを考えさせる指示がある。夜には「よるに なりました。そらには かがやく ほしが だんだんと ふえて きました」と書かれ、色々な星が光っている様子を表すにはどうしたらいいかを考えさせる指示がある。明け方には「もうすぐ あさです。ほしは だんだん みえなく なって いきます」と書かれ、星が見えなくなっていく様子を表すにはどうしたらいいかを考えさせる指示がある。このように関連があり変化していく複数の絵に対して音楽を考えることにより、音楽の始め、中、終わりがつくられることになり、音から音楽へ構成される。幼稚園教員養成としての絵から音楽をつくる場合も、音のみではなく音楽に構成する方法まで考えた音楽づくりも経験する必要があるのではないかと考える。

本実践では、学生は音楽をつくることを想定して4人グループで何らかのテーマを決め、各人がテーマに基づいて1枚ずつ絵を描いた。その4枚の絵が一枚の紙に示されていた。それを別のグループの4人が見て相談して音楽をつくった。4枚の絵のそれぞれを一つずつ音にしたグループもあれば、4枚の絵のつながりを考えて音楽にしたグループもあった。この活動は、それぞれの絵から様々な音を想像する活動であり、音を音楽へと構成していく多様な可能性がある実践である。4枚の絵から起承転結を考えて音楽をつくれれば、音楽の構造が自然と形づくられるのではないだろうか。

## 6. まとめ

以上の考察から、本授業実践を通して得られた保育内容の音楽表現に関わる知見をまとめる。

子どもの感覚や感情、思考に対して、保育者として気づき、返していく能力を身につけるためには、さまざまな音や、音の構造、素材への気付きとともに、さまざまな表現方法を体験して学ぶこと、創造的で融合的な表現のあり方について学ぶことが必要である。しかしそれに加えて、音を音楽へと構成していくことも、重要であるということが、授業分析を通じて明らかになった。

またそうした学びには、学生が互いの違いに気づき、それを刺激として学ぶという関係が有効に作用するが、それは単に、表現の幅を広げるだけでなく、創造や構成および再構成を重ねるためには、他者の表現や、そこにこめた思いや前提を受けて、それに対して新たな表現を加えながら返していくという行為が、学生相互の関わり合いによって可能になるからであるということがわかった。

さらに、それらの要素を含みこむ授業実践として、視覚表現と音楽表現を関連させる内容が、幼稚園教員を目指す学生としての様々な学びにつながっていることが明らかとなった。

<sup>1</sup> 伊藤仁美「保育現場における創造性を育む音楽表現に関する一考察—中野区私立幼稚園連合教育研究会の活動を通して—」『こども教育宝仙大学紀要』第8号 2017年3月

<sup>2</sup> 曾田裕司「保育の「表現」領域における幼児の「変化する音楽表現」への着目」『尚綱大学研究紀要人文社会科学編』第48号 2016年

<sup>3</sup> 村上玲子、三島瑞穂「保育者養成校における教科目「保育表現技術」の捉え方と課題—音楽担当者の立場からの

考察—』『人間生活科学研究』第53号 2017年 pp.26-27.

<sup>4</sup> 平尾憲嗣、滝沢ほだか「保育者養成における幼児音楽の学びについて—幼稚園実習における音楽の活動に着目して—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』第50号 2016年

<sup>5</sup> 吉村智宏「子どもの自発的な音楽表現の練り上げを目指した研究—子どもによる他者評価を取り入れて—」『教育実践研究』第27集 2017年

<sup>6</sup> 高奈奈「子どもの創造性を豊かにする音楽表現活動」『児童教育学研究』第96号 2017年3月

<sup>7</sup> 小島千か「絵本を用いた音楽づくりにおけるイメージのはたらき」『山梨大学教育人間科学部紀要』第11巻、2010年3月 p.116.

<sup>8</sup> 同上 p.123.

<sup>9</sup> 伊藤義明「絵本をうたう」『月刊 音楽広場』2月号とじこみ研究特集 1996年、杉山三四郎『BIG, BIG TREE 杉山三四郎 絵本をうたう...』(CD) 2004年、杉山三四郎『あなたがいるから 杉山三四郎 絵本をうたう2』(CD) 2007年、小島千か「絵本と音楽：子ども図書室での学生による発表を通して」『山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要』第12巻 2007年 pp.1-12.

<sup>10</sup> 小原光一他『小学生のおんがく1』教育芸術社 2015年（平成26年検定 平成27年発行） pp.50-51.